



愛媛県西条市

地域の未来と アントレプレナーシップ

The Future of Communities
& Entrepreneurship

教育業界でも注目されるアントレプレナーシップ(起業家精神)。この連載では、全国さまざまな地域の未来に向けて取り組むアントレプレナーの方々取材し、何かを変える一歩目の踏み出し方、高校教育にも通じるアントレプレナーの視点を探ります。

第4回：放置竹林の問題に「私」ができること。メンマ作りの挑戦



「竹なら切って食べられる」

小さくてもいいから、まちに対して自分ができるアクションをしてみる——私にとって、その一歩目が『メンマチ』の製造でした。

愛媛県松山市で生まれ、学生時代は日本とイギリスで建築学・都市学を学びました。次第に建物よりもまちに興味をもち始めて、不動産開発の企画会社に就職。働くなかで、どこか地方に拠点を構えてまちの課題に向き合っていたと考えられるように、2019年に地方での起業支援プロジェクトに応募し、祖父母の家のある西条市に移住しました。

西条市は、水と緑が溢れる自然環境に恵まれた地域です。子どものころは、山間部にある祖父母の家を訪れるたびに、里山や川で遊ぶのが楽しみでした。ところが移住して調べてみると、近年は手入れされないまま荒れた人工林や、その森林と深く関わる水資源の減少など、さまざまな課題を抱えていることがわかりました。ただし、林業の課題は大きく、流通も含めて複雑な構造があり、個人で介入するにはハードルがとても高かった。

hinel代表 山中裕加さん

愛媛県松山市生まれ。明治大学と同大学院で建築を学び、在学中にイギリスにも留学。帰国後、大学院を卒業し、不動産会社に就職。2019年、愛媛県西条市へ移住。2021年より放置竹林の若竹を使った『メンマチ』の製造販売をスタート。2022年にはシェアスペース『パーラー〇〇』をオープン。



そんなときに、「現場を知りたい」と思っ
て参加した竹林整備のボランティア団体
で、生えるがまま放置された竹林も、災
害リスクや環境への悪影響につながって
いることを教えてもらいました。竹なら、
自分たちで切って、加工し食べることも
できる。自分が今すぐできるアクション
として、放置竹林の問題の認知度向上
と、楽しい竹林整備につながることを目
的に、メンマの製造・販売をやってみよう
と考えたのです。

折しもコロナ禍の真っ只中で、東京の
クリエイターと商品化についてオンライン
ミーティングを重ねました。放置竹林の
問題をキャッチーに伝えるため、マッチョ
な覆面ヒーロー「メンマチヨ」というキャラ
クターを作り、メンマは瀬戸内らしいレモ
ン味に。エクセルで樂觀的な売上予測を
して、この規模ならすぐに事業化できそ
うだと思っていた。ところが、そう簡単に
はいきませんでした。

収穫する人材が集まらない

そもそも食品の製造販売の経験がな
い、素人の挑戦です。やり始めると、当然
さまざまな課題にぶち当たります。レモ
ン味のメンマをつくるのは技術的に難し
く、製造に苦戦しました。さらに、原材料
の若竹を計画的に収穫してくれる人材
を確保することが、案外とても難しくなっ
たのです。突然メンマを作り始めた私を
不思議な目で見ながらも「なんでも協力
するよ」と手を貸してくれる地域の方は
いました。ただ、善意に頼るばかりでは事

業として必要な量・ペースが保てません。
地域課題に個人がアクションすることの
意義や本気度はそう簡単には伝わらず、
人を募っても「なぜメンマ?」「金になら
ないからやめておけ」と、なかなか理解も
得られませんでした。

しかし、今思えば当然のことだったと
思います。多くの人にとって移住者は、何
者かよくわからない存在です。「まちを
変えたい」と二方向的な課題感を押し付け
られた経験や、すぐに出ていくというイ
メージから、あえて期待しないようにして
いる方もいたかもしれません。

その壁を乗り越えるには、地道な対話
を繰り返すしかありませんでした。地域
の人との飲み会に顔を出し、気取った自
己紹介ではなく、一人の人間として信頼
してもらえるように話す。「まちを変え
たい」という大上段からの目線ではなく、
私という人間がこのまちで何をして、ど
う生きていきたいのかを伝える。この積
み重ねで、少しずつ関係性ができあがって
いきました。

協力してくださる方も増え、試行錯
誤を経て、2021年6月に『メンマチヨ』
の発売を開始。完成したときは、本当に
ほっとしました。

まちは個人の意志の集積

なぜ、このようにして、まちに対して自
分ができるアクションを、ひとつでも形に
したいと思ったのか。その原点は2つの風
景にあります。

1つ目は、学生時代に訪れたインドの



1 西条市内で収穫した若竹を使用し、地元の加工場でpH管理を行いながら発酵させている。レモンの風味を出すために、パウダー状のレモンをまぜるなど試行錯誤したが、最終的には皮を使うことでレモン味を完成させた。

2 放置竹林問題をできるだけ楽しく、おいしく解決していくことを目指した、地域課題に対する小さなアクション『メンマチヨ』。西条市に限らず、全国の放置竹林でも収穫パートナーを募集し、活動の幅を広げている。

まちです。ぎゅうぎゅうに個人店が連なり、それぞれが自由に商売していて、何とも言えない活気に溢れていました。都市計画や規律に基づき、秩序をもつてつくられた日本やイギリスの風景とは違う、ごちゃごちゃしたインドの、カオスが、私にはたまらなく面白く感じられたのです。

2つ目は、移住してきた西条市の里山です。私が子どものときに遊んだ、きれいな山や川の景色がそこかしこに残りながらも、高齢化が進み、手入れする人がいなくなると、途端に荒れはててしまっていました。

なぜ、インドのまちはあんなに面白かったのか。そしてなぜ、住む人がいなくなるだけで、まちは急速に廃れていくのか。異なる2つの原風景から私が思い至ったのは、まちとは、あくまで個人の「意志」の集積である、ということでした。まちは、統率者の企画書の中でつくられるわけではない。人が、その日を懸命に生きている——生業をつくって働き、自分が楽しいと思うことを表現する、個人の意志ある活動が積み重なって、魅力のあるまちができていく。だから、「まちの、この課題を解決しよう」と上から押し付けるのではなく、そこで生活を営む一人ひとりが、自分なりの意志をもち、いきいきと活動することが大切だと思ったのです。

近年の日本では、あらゆる場面で規制やルールが増えています。もちろん安全のために必要な規制もあるでしょうが、規制だらけでは「うまくいくかわからない

れど、ひとまずやってみよう」「まずは、自分にできるアクションをしてみよう」というような実験的な活動は、なかなか生まれなくなります。ゆるく、まちに対して「何かやってみよう」と思える人が集って、挑戦できるような場をつくりたいと、誰かの「やりたい」を応援するシェアスペース『パーラー○○』をオープンしました。時間帯や曜日によってカレー屋さんやバー、イベント会場など、お店の内容や用途が変わる場になっています。この場を通じて、誰かの新しいアクションを応援できたら嬉しいです。

私の事業を手伝ってくれる若い世代の中には「私も、まちづくりに関わりたい」「まちの課題を解決したい」と言う人もいます。おそらく全国のまちに、さまざまな課題は山積していて、困っている人もいるはずですが、でも、ただ「まちづくり」をしたい」と漠然と思っているだけでは、誰かがそのための道筋を示してくれることはありません。あまりに大きく複雑な課題を前に、立ち往生してしまうこともあるでしょう。

それなら、まずは自分にできる小さなアクションをひとつ起こしてみてもいいかなと思います。やってみると、私のようにさまざまな壁にぶつかるはずですが、現実の厳しいパンチを喰らいながらも、「やってみたい」を形にしてみる。それを繰り返すうちに漠然とした「まちづくり」の解像度が上がっていく。小さな意志こそが、まちになると信じて、私も自分にできることを形にしていきます。



地域の未来につながる アントレプレナーの視点

視点

1

地域に山積するさまざまな課題の中で、もっとも自分が「手をつけやすい」と考えた放置竹林の課題に対し、自分にできるアクションを考えて「メンマの開発」の挑戦に至った。まずは自分にできる小さなアクションを考えてみることに。

視点

2

「小さなアクション」といっても、実際に行動を起こしてみると、さまざまな壁にぶつかる。特に、自分勝手な取組にならないよう、飲み会や地域の集まりに顔を出し、個人対個人の対話と地域の温度感を大切に、関係性を築いていった。